

「石垣島・白保におけるサンゴ礁文化継承のとりくみを学ぶ」

担当教員名 梶 裕 史

コース概要

日程	2017年3月9日～13日(4泊5日)
場所	沖縄県石垣島・白保集落
参加人数	16名

コースのねらい

「サンゴ礁文化」とは何か、それを継承する意義とともに、住民主体で持続的な地域づくりにとり組んでいる白保集落で開始された、手づくりの「スタディツアー」に参加して実感的に体験学習します。

内容

日本最南の沖縄県八重山諸島・石垣島にある白保集落は、かつては「魚湧く海」と呼ばれた豊かなサンゴ礁の海に面して、自然の恵みを持続的に暮らしに活かす「半農半漁」の自給自足的な生活文化を築いてきた農村です。この白保は、海の埋め立てによる新空港建設計画をめぐる長年の苦難を乗り越え、21世紀から、外部自然保護団体WWFが設立した組織「しらほサンゴ村」と住民有志との協働により、サンゴ礁文化の継承による持続的な地域づくりを始めました。その活動は現在第二段階に入り、NP0 夏花という新たな住民組織に受け継がれています。このNP0が収入源の一つとして始めたのが、地域のとりくみを体験実習するプログラムを豊かに含む「スタディツアー」です。本FSでは、初日の午後に現地集合、2日目にマイクロバスで石垣島を概観する島内めぐりをしたのち、夕方からスタディツアーに参加しました。今回は、日程前半の悪天候により用意された代替プログラムが、かえって地域住民との良好な「交流」を深める効果をもたらしました。2日目午前に中止となり最終日にふりかえたシュノーケリングも、快晴のもとで体験でき、感動的なフィナーレとなりました。

2日目：夕方 「入村式」(しらほサンゴ村にて) サンゴ礁文化のレクチャーなど

3日目：午前 NP0 副理事長の案内で、沖縄の伝統的な集落景観の「原風景」が残る集落を散策。サンゴ礁文化の具体例(建材としての利用など)に触れる。サンゴ村に戻って、方言講座(交流会での自己紹介用)

午後 予定していた「漁体験」が天候不良で中止。代替プログラムとして、参加した「しらほ子どもクラブ」の児童とともに、海岸でのアーサ採り、伝統舞踊体験(舞踊教室師匠の指導)、交流会の料理準備手伝い等。非常に充実した「交流」となる。

夕方から 民泊先など白保の人々との夕食交流会。学生は練習した「踊り」を披露(真謝節、安里屋ユンタ)。

4日目：・「グリーンベルト」植栽の代表的な素材である月桃(げっとう)の高度加工施設の加工体験

・「白保日曜市」見学(地域活動の重要な収入源で、月桃を使った新商品など地産地消の「6次産品」販売も豊富)

小ライブの余興として、学生達は前夜の「踊り」を披露(住民以外の日曜市「出演」は画期的！)

・午後 ホームスティ先の「稼業」体験(野菜農家、畜産、織物、花卉生産) 夜は4家庭に民泊

5日目：午前 赤土流出防止植栽活動として、糸芭蕉300株を植える → 「離村式」(NP0スタディツアー終了)

午後 民宿マエザトの船にてサンゴ礁シュノーケリング。 夕方 現地解散



伝統舞踊体験(練習)



赤土流出グリーンベルトづくり



日程後半、天候回復した白保海岸にて

日程をみると、「海」と離れてみえるプログラムが少なくない印象もあるでしょうが、全て、海と陸上の暮らしぶりとの密接なつながり—白保住民がエコな農業やライフスタイルを築かないと、「魚湧く海」「命継ぎの海」の保全は難しいこと—を伝えるねらいがあります。サンゴ礁を健康な状態に保っていくためには、地域をあげての陸上のとりくみが不可欠であり、しかもその活動がボランティアではなく収益を伴うことが、住民参加を促進するために非常に大切です。よって有料のスタディツアーに参加することは、ささやかながら白保の持続的な地域づくりに貢献することにもつながるのです。

このスタディツアーの最大の「売り」は、意識の高いNPO理事クラスの家庭に分宿し、稼業を体験するホームステイでしょう。1泊がこれに当てられ、体験者は、単に「自然」にふれるだけではなく、伝統的な生活文化の生きた体験者、すなわち自然に寄り添って生きる力を豊かに持つ人々と親しく触れ合えることこそ、自然と共生してきた文化が残る場所を訪問する最大の魅力であること—「人」が地域の最も尊い資源であること—に気付けるはずです。

ホームステイでの心に残るふれあいから、「いつか必ずもう一度白保にきたい」と思う参加者が多かったことは、このスタディツアーの意義をよく物語るものです。一度きりの旅ではなく、リピーターとして、「白保ファン」になって再訪してくれ、地域活動のサポーターになってくれるようなゲストを増やすこと、これがNPOがめざす「交流」なのです。私達はささやかながら白保サポーターの一員となるべく、継続的な参加に加えて、プログラム作りにも協力していきたいと思っています。



稼業体験(野菜農家)



シュノーケリング 500歳のハマサンゴの上



稼業体験(畜産業 牛舎)

学習を終えて

「白保の文化と自然のつながりにふれた5日間」3年 松尾理紗

白保村でのフィールドスタディは自然の豊かさと現状を実感するものでした。白保の海は海岸からは青くきれいに見えても、海の中でサンゴを目の前を見ると白化が進んでいたり、昔ながらの漁法を守る漁師の減少といった課題も隠れていることを聞き、観光と自然保護の両立の難しさを知りました。またホームステイでお世話になった農家の美里清矩さんのお宅ではおばあに『昔から野菜は宝のように大事に育てて食べた』と教えてもらい、また今でも続く伝統的な成人式のこと聞かせてもらい、長い時間の中で培われてきた周りの人や自然との深いつながりを実感できました。

「力を合わせて地域の課題へ」1年 織田海斗

ホームステイでは、畜産業を営んでいる宮良家にお世話になりました。宮良操さんは市議会議員も務めている方で、新石垣空港建設をめぐる起きた様々な問題について教えてくれました。「当時は家族内でも賛成派と反対派で分かれてしまい、一時は家族もバラバラになってしまった」と壮絶な体験を涙ながらに語る姿は今でも忘れられません。「そうした過去があるからこそ、サンゴ礁問題や文化継承のため全員で力を合わせなければいけない」と、白保の課題に必死に取り組む宮良さんご夫妻のもとでホームステイできたことは、自分の考え方を变える貴重な体験となりました。

「別府阿蘇地域の地熱・火山活動ー自然環境と生活ー」

担当教員名 杉戸信彦・竹本研史

コース概要

日程	2017年3月5日～9日
場所	別府、および阿蘇くじゅう国立公園
参加人数	24名

コースのねらい

別府～阿蘇は「豊肥火山地域」に属する世界有数の地熱・火山地域です。前半はその豊かな自然環境について巡検と講義で学びます。そして後半は「泉都」別府に焦点を絞り、歴史や文化に触れたうえで各班フィールドワーク（野外観察や聞き取りなど）を行って「課題発見」を目指します。

内容

コース前半の主題は、噴気や温泉、地熱発電、火山噴出物、火山地域ならではの景観と噴火史、人類の軌跡、地形と土地利用です。事前学習で文献を読み込み、知識とイメージを持って現場を踏むことで（明礬～鉄輪地域の半日巡検および別府～阿蘇の日帰り巡検）、机上と現地の双方向フィードバックを図っています。また、別府市内にある京都大学地球熱学研究施設を訪ね、竹村恵二教授による講義と施設内案内を通じて、研究の最前線や地熱活動の恩恵とリスクへの理解を深めます。竹村教授には別府～阿蘇日帰り巡検の午前中も現地にてご指導頂きました。



地熱と断層、水循環など、噴気や温泉のサイエンスを体感する半日巡検（別府市明礬～鉄輪エリア）。
湯の花小屋や共同浴場、地獄蒸し、湯雨竹（ゆめたけ）なども観察しました。

別府～阿蘇日帰り巡検は、別府から由布、くじゅうを通して阿蘇の大観峰を訪ね、その後八丁原地熱発電所に立ち寄るコースです。地形を俯瞰できる地点や、地質や土壌を確認できる「露頭」でストップし、事前に得た知識とイメージを総動員しながら観察を行います。

露頭ではとくに「黒ボク土」と「K-Ah 火山灰」の分布と特徴を確認し、その意味を考えました。大観峰から見渡す雄大な景観や、八丁原地熱発電所における説明と施設内見学を含め、参加者各自がさまざまなことを感じながら理解や発見をし、また疑問を抱いたことが、レポートでもよくわかります。

後半は別府に焦点を絞り、歴史や文化に触れる半日巡検に参加した後、計1日にわたるフィールドワークを各班で実施しました。事前学習で方法論を学び、その後何度か話し合っ、テーマと「行動計画書」を練り上げています。

各班の関心は、別府の自然環境や歴史的背景、観光の現状、また昨今の地熱発電を取り巻く状況など多岐にわたりました。訪問先を厳選して観察を行ったり話を伺ったりする班や、事前に訪問の約束を取る班、質問をあらかじめ送る班、また郷土資料の収集を行う班など、行動の内容も多様です。

事後学習では、得られたデータを整理して、「問い」を立てる作業に取り組みました。

学習を終えて

今回のフィールドスタディでは、事前学習と現場を通して別府阿蘇の自然を「五感」を使って学ぶだけでなく、班ごとに計画を立てて行動する、話をうかがうなど、机の上では体験出来ないことを学びました。また、現地の人々の優しい対応や、班の皆と仲良くなれたことから人とつながる温かさを感じました。とてもよい体験が出来て参加してよかったと思っています。

(1年 鯨井千恵)

このフィールドスタディでは、対象の地を実際に見て歩くことでしか感じ取れない、固有の風土や地形的な特徴などを学ぶことができました。最も印象的なのはグループワークでした。班長を務めるなかで、テーマや行動計画を決めていくプロセスや、話をお聞きする機会など、今後自身の糧となる貴重な経験をすることができました。総括すると、学習はもちろんメンバーと協力して楽しく活動できる、密度の濃いフィールドスタディでした。(2年 佐藤武典)



別府市南畑の露頭にて黒ボク土と K-Ah 火山灰を手にとって観察。
大観峰でも観察し、分布と特徴を確かめました。



解散前に全員で。充実感が伝わってきます。

「地域における就労継続支援・生活介護活動への参加 ―障害者とともに同じときを過ごす―」

担当教員名 國則 守生

コース概要

日程	2017年2月7日～2月28日の4日間
場所	埼玉県三郷市
参加人数	12名

コースのねらい

このフィールドスタディは知的障害者・精神障害者が地域で生活するために行う作業や活動に学生が参加して地域での障害者福祉活動を理解し、学生自身が地域で何ができるのかをフィールドで考え実感してもらうことを目的に実施しているプログラムです。

コースのねらい

このフィールドスタディは知的障害者・精神障害者が地域で生活するために行う作業や活動に学生が参加して地域での障害者福祉活動を理解し、学生自身が地域で何ができるのかをフィールドで考え実感してもらうことを目的に実施しているプログラムです。

内容

フィールドの現場は埼玉県三郷市の社会福祉法人（緑の風福祉会）で、春季休暇期間の事前に決められた4日間、施設を訪問しました。参加活動は大きく分けて①生活介護および②就労活動（パン製作・販売、古新聞などの回収、各種の軽作業・内職活動）の2つの活動に大別されますが、参加学生は施設利用者の4つのグループのなかに入って活動をしました。

障害者と活動をともにするのが初めての参加学生も多かったが、4日間の実習を通じて、さまざまな気づきを体験しました。

学習を終えて

実習の記録を残すべく、4日間の実習記録を記載したフィールド・スタディ・ノートを作成したほか、①参加目的、②参加前後のそれぞれの感想、③パン販売に関する施設への提案ならびに④障害者福祉に関する自由調査などを取りまとめた報告書を作成しました。以下は、気づきの一部です。

「今回のFSで気づかされたのは、ある障害を持つその方を「良く知る」という施設の姿勢だった。何かの基準に合わせるのではなく、本人を中心に考えていた。自立するために過度に「できること」を求めずどう支援するのか。その構成も、「できないこと」の支援や残存能力の活用に偏ると、支援＝「できないこと」は、失敗のない縛りの支援になり、本人も自由がなくなる。しかしこの施設では、ありのままの姿を「良く知る」ことで、そのまま本人が居心地よく過ごせるよう考えられていた。」（4年 黒澤多美子）



フィールド・ノートの記入



実習後の学生間の意見交換



翌日の内職作業の用意

「津軽鉄道で結ぶまちづくり」

担当教員名 西城戸誠・辻英史

コース概要

日程	2017年2月16日～19日
場所	青森県五所川原市、中泊町
参加人数	14名

コースのねらい

赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動や、コミュニティカフェの実践を学び、着地型観光、地域活性化のあり方を学びます。

内容

コースの狙い：本フィールドスタディは、赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動を見学しながら、奥津軽地方の「着地型観光」について考えていきます。企業組合・でるそーれの皆さんが運営しているコミュニティカフェの実践を始め、津軽鉄道沿線の地域づくり、まちづくりの実践を学ぶとともに、このフィールドスタディの実践によって、地域のまちづくりの実践をつなぎ合わせるという意味も込められています。本フィールドスタディは、訪問先から「学ぶ」という側面と、私たち自身が「地域にかかわる」ということがどういう意味を持つのかという点を再帰的に捉えることを企図しています。

コースの内容：1日目：五所川原駅近くのコミュニティカフェ「でる・そーれ」に集合し、五所川原の街歩きをした後、五所川原市の夏を彩る立佞武多の展示がある、「立佞武多の館」を訪問しました。立佞武多の館館長から「立佞武多と津鉄とわたし」と題した話を伺い、立佞武多と津軽鉄道、五所川原という地域との関係について学びました。続いて、コミュニティカフェを運営する、でるそーれの代表から「場としてのコミュニティカフェを考える」という講演をしていただきました。初日の宿泊はグループに分かれて、農家民泊をしました。地域の方といろいろな話をして、世代を超えた交流を行いました。

2日目：農家民泊先から集合し、昨晚の出来事のふりかえりを行った後、津軽鉄道のストープ列車に乗り、津軽五所川原駅から金木駅まで移動しました。太宰治の生家である斜陽館や、新座敷を訪問し、太宰治を巡った観光の「質」の違いについて学びました。その後、津軽鉄道の社内で、津軽半島観光アテンダント、津軽鉄道サポーターズクラブ、津軽鉄道株式会社の関係者からの津軽鉄道に関わるさまざまな活動のレクチャーを受けました。

3日目：つがる市フィルムコミッションの川嶋大史さんに、地元を舞台とした映画づくりについて話を伺い、自分の「ふるさと」とは何かという点のレクチャーを受け、昼食をとりながら地域のまちづくり団体 NPO 法人かなぎ元気倶楽部の話を伺ったあと、中泊町の「イネ子の畑」でアスパラガスの収穫体験をしながら、佐藤イネ子さんの話を伺いました。午後はこれまでのフィールドスタディの振り返りを行い、グループ別にワークショップを実施しました。夕食は中泊町のグリーンツーリズム団体「かけはし」の方をお願いをし、学生たちも少しだけ夕食づくりを手伝いました。

4日目：「かけはし」の方が作ってくれた朝食を頂いた後、十三湖の資源（シジミ）に関わる話を伺った上で、でる・そーれの皆さんと最後のまとめを行いました。事後学習会では、フィールドスタディ全体の振り返りを行い、今後の人間環境学部での学びとの関連について議論をしました。



金魚ねぶたへの色づけ体験

学習を終えて

私は奥津軽 FS を通し、現場に立っている様々な立場の市民の声を聴くことができました。奥津軽では、ストーブ列車で有名な津軽鉄道を中心として、廃線の危機から脱するために発足したサポーターズクラブのみなさんなど、多くの市民の方が町おこしに関わっていました。「津鉄を元気に、地域を元気に」。そこでは津軽鉄道が元気になれば、地域も元気になるという思いで活動に取り組んでいました。しかし、活動に参加している方々にも一人一人に想いがあって紆余曲折や、悩みや葛藤があったのだと知りました。また、現地の方と触れ合う中で、都会には感じられないコミュニティの強さだったり、先行研究では分からない複雑な人間模様や、現場の声を聴くことができました。これらの経験は私自身多くの刺激を受けました。また、3泊4日という短いフィールド体験の中で、私たちがよそ者として果たせる役割を改めて考えさせられ、大変貴重な経験となりました。(2年・大平佳奈)



中泊町・グリーンツーリズム「かけはし」の方と一緒に



新座敷での太宰治の説明



冬のアスパラ収穫体験



冬の潤庶0湖の前で



津軽鉄道社内でのワークショップ



課題の発普潤翼 R ミュニティカフェ・でるそーれ

「オーストラリアフィールドスタディ：英語と環境保護を学ぶ」

担当教員名 長峰登記夫、ストックウェル エスター
コースのねらい

コース概要

日程	2017年2月26日～3月12日
場所	オーストラリア、クイーンズランド州、 ゴールドコースト
参加人数	19名

以下の三つの大きな研修目的があります。

- ① ボンド大学付属語学学校で英語を習うこと
- ② 世界的に珍しいオーストラリアの自然を学ぶこと
- ③ オーストラリアの文化を学ぶこと

内容

オーストラリア・フィールドスタディ（A F S）には3つの特徴があります。それは、①大学付属英語学校での語学研修②オーストラリアの文化を学ぶ、③世界的に珍しいオーストラリアの自然を学ぶ、この3つを統合的に学習・体験できることです。

語学の授業は、クイーンズランド州ゴールドコースト市内のボンド大学キャンパス内にある大学付属語学学校（Bond University English Language Institution (BUELI)）で行われました。BUELI 授業の開始初日に、Placement Test（英語力の判断をするためのテスト）が実施されました。このテスト

のスコアに基づき授業を受けるクラスレベルが指定されます。これは、「生徒の現在の能力にあうレベルで英語を学ぶことがその習得に役立つ」という考えからです。授業のプログラムは、学習の基礎となる項目である「聴く、話す、読む、書く」の能力向上を目指して総合的に進められました。

2週間の本フィールドスタディ中は、各学生が、日本人学生の受け入れ経験のあるオーストラリア人の家庭で過ごしました。オーストラリア人の実際の生活を通じて、オーストラリアの文化を学ぶことも貴重な経験となりました。

フィールドスタディではタンガルーマ島（一泊二日）、ラミントン国立公園（日帰り）の2カ所を訪ねました。オーストラリアは世界でも最も豊かな自然環境をもち、かつ自然環境や動植物の保護に積極的な国のひとつですが、そこで自然環境や動植物の保護について勉強しました。

タンガルーマ、モートン島は、世界で三番目に大きい砂の島です。モートン島には様々な自然環境があり、素晴らしいビーチや砂丘を始め、湖、小川、岬等の地形、スゲ、ペーパーバッグスワンプ、バンクシア、マングローブなどの植物の育成地にもなっています。また様々な野鳥も生息しており、ジュゴン、イルカ、クジラ、海亀、エイなど多数の海洋生物が生息しています。モートン島の殆どの場所は国立公園に指定されており、厳しい取り決めにより自然を保護しています。参加する学生は1泊2日の日程で、特に元気な野生のイルカ達に直接餌を与える貴重な体験を含む、島にある様々な自然環境を体験し、その保護などを学びました。そして、島の自給自足についても学びました。

ラミントン国立公園は1994年にユネスコの世界遺産に登録された、 Gondwana 雨林保護区の一つの場所です。レミントン国立公園には、亜熱帯、乾燥、温帯、寒帯の気候に属する植物が生息していて、太古の自然を思わせる景観が広がっています。亜熱帯地域のナンヨウスギ、寒帯地域にのみ見られるナンキョクブナ、また最古のシダ植物などの170種以上の希少な植物の他、クサビオヒメインコやアルバートコドリなどの絶滅危惧種を含む270種の鳥類、フクロギツネやパルマワラビー、ヒメウォンバットなどの珍しい動物を見ることが出来ます。本フィールドスタディでは、この貴重な自然をオーストラリアの政府がどのように保護しているか、どのように eco-tourism に結びつけているかなどを学びました。こうしてA F Sでは、英語学校で英語を学び、F Sで自然環境や動植物の保護について勉強し、そこで学んだことについてホームステイ先の家族と話すなど、オーストラリア人の実際の生活を通じて、オーストラリアの文化を学ぶことができます。



ボンド大学キャンパス

学習を終えて

AFS の感想

私が AFS に参加した理由は、英語力の向上に加えて固有種が多く自然豊かなオーストラリアで生態系保全について学びたかったからです。ホームステイ先での生活とボンド大学での授業は英語力を向上させるための良い機会でした。また、タンガルーマ島での体験は特に充実しており、海の生態系保全についてのレクチャーを英語で受け、野生のイルカに餌付けをしたことは私にとってかけがえのない経験になりました。ラミントン国立公園ではガイドの方の説明を聞きながらオーストラリアの豊かな自然に触れ、実際に目で見て感じることの大切さを学びました。(中村美月、2年生)

現地では、語学と環境の両方を学習し、充実した2週間を過ごせました。語学学校では、世界各国から来た学生と交流し、ホームステイ先では英会話を楽しむほか文化の違いなども体感しました。校外学習では、オーストラリアの自然を堪能しその保護方法等を学んだことで、自然に対する価値観が変わりました。また、自由時間もあり、自分の行動力次第で何でもできることがこのFSの魅力だと思います。(白寄茉莉、2年生)



タンガルーマ、モートン島で海洋生物学の専門家から話を聞く



タンガルーマ、モートン島



レミントン国立公園で珍しい鳥



英語コースを終え、記念撮



レミントン国立公園の森で専門家から話を聞く

「障がい者福祉の体験」

担当教員名 朝比奈 茂・宮川 路子

コース概要

日程	2017 年 8 月 5 日～19 日
場所	群馬県安中市松井田町ゆきわり山荘
参加人数	24 名

コースのねらい

障がい者の方々と寝食をともにして過ごすことで福祉活動の現状に触れ、その大変さを身をもって体験し、人として人生のあり方、今後の生き方を考え、見つめ直すことを目的としています。

内容

障がい者の方と一対一で向き合い、2泊3日、または3泊3日の合宿で様々な活動に参加しながら寝食をともにします。活動内容はジョギング、マラソン、和太鼓、絵画、水遊び、プール遊び、ハイキング、温泉、バーベキュー、野菜の収穫、ポニーとの触れ合い、食事作りなどバラエティーに富んでいます。ほとんどの学生さんは障がい者との触れ合うのは初めてで、参加前には不安そうな面持ちでしたが、合宿参加前にリーダーの方との打ち合わせを行い、合宿に参加し、日にちを追うごとに落ち着いてしっかりと対応が出来る様になっていきます。

FSを終えた後には達成感と充実感で自信に満ちた顔つきに変わりました。障がいがあってもなくても同じ人間であり、特別なことは一切ないということを学んで安心するとともに温かい気持ちになったようです。言葉が通じなくても気持ちが通じること、笑顔が人を幸せな気持ちにさせること、スキンシップ、ぬくもりが人に安心感を与えることなど、当たり前のように普段の生活では忘れている小さいことがいかに大切かを気づかせてくれる実習となりました。人との関係を構築するうえで相手を理解しようと努力し、思いやることが相手の心をひらき、そして自分の心も癒されることも実感しました。実習の終わりのお別れのときには寂しい気持ちがこみあげて涙を流す学生もいました。今回は2回目の参加となる学生もいましたが、1回目のときとはまた異なる気づきがあり、感動をもったようです。事後講義では、障がい者と健常者の間にある壁を作っているのは健常者なのだという意見が出ていました。

学習を終えて

私が今回FSで成し遂げたいと考えていたことは、「年齢、価値観、立場などの違いのある障がい者の方と心を通わせ、様々な壁を越え、心のそこから笑いあう」ことだった。FSに参加するまで私は大学生活で身に着けたことが役に立つと考えていたが、実際にともに時間を共有してみると私の考えが浅はかなものであったことを思い知らされた。なぜなら私は言語によるコミュニケーションに依存していたからだ。私が担当したのは会話が困難なYさんで、彼との交流を深める術を私はもっていなかったのだ。これではいけないと感じ、身振り、手振りによる対話を心がけるようにした。手をつないだときはその手を強く握り返した。一緒に他の人のためになるようなお手伝いをして、ちゃんとYさんができたときにはハイタッチをした。そのとき、Yさんの口元が少し緩んだ気がした。Yさんと銭湯でアイスクリームを食べているとき、「美味しそうにアイスクリームを食べる選手権」があったら間違いなく一位を取れるほどの素敵な笑顔を見ることができた。結局はアイスクリーム頼りなのだが、あの瞬間は二人とも心の底から笑っていたと思っている。4年J組横山 陸



おにぎり作り



トレッキング



トレッキングの風景

「環境と文化の都市・飯田のまちづくり、地域の歴史と伝統芸能」

担当教員名 竹本研史・石神隆

コース概要

日程	2017年8月4日～7日
場所	長野県飯田市ほか
参加人数	46名

コースのねらい

一つの地域を深く知ることは、広く日本や世界を知ることに通じます。わが国の典型的な地方都市である飯田市に出かけ、歴史、文化、生活、環境、そして行政など、多面的な地域理解への体験をしていきます。この体験学習によって、地域というものへの見方が変わり、また地域への興味や関心が高まり、日本や世界における地域の魅力を積極的に探す自分になっていくことを発見することでしょう。



伝統的建造物群保存地区、妻籠の街並を見学

内容

旧城下町の飯田市は、人口約10万人の典型的な地方都市で、人形劇とリンゴ並木を愛し、エコツーリズムを推進する南信州の環境文化都市として有名です。このフィールドスタディでは、人形劇フェスティバルの期間にあわせ、まちの主要な行事に参加することにより、また、環境重視のまちづくりをめざす飯田市の行政や市民活動を多方面から学習することにより、新しい地域のあり方を考えていきます。

さらに、市域にある山間部の伝統的な習俗や生活環境を体験、加えて隣接広域圏にある伝統的な町並み保存地区の妻籠（つまご）・馬籠（まごめ）などを訪れたりし、地域の文化や生活、歴史、そして、現在のまちおこしを体感的に学習していきます。

飯田人形劇フェスタ、飯田りんごんへの参加

飯田は世界でも有数の人形劇の町です。毎夏のフェスタには日本各地や世界から300もの劇団が飯田にやってきます。まち全体が劇場と化す珍しいフェスタです。フェスタでは劇人だけでなく、手伝いの市民や見物の私たちも主役です。夜は、市民総出の形で「りんごん」踊りが始まります。私たちは、揃いの衣装を着てそれに参加します。全国の他大学からの学生と一緒に連を組み、市街地を踊り歩きます。一市民になりきってのこのような形の参加により、飯田のまちを逆に内側からよく理解することが可能になります。



地域に伝わる伝統的人形劇（人形浄瑠璃）を鑑賞

伝統的な場での伝統的人形劇の鑑賞

伊那谷（飯田地方）の各地には、江戸時代から伝わる人形浄瑠璃が伝承されています。公演の場は地域の神社境内など伝統的に行われてきた味わいのある場所で、天保時代建設の国指定重要文化財の舞台も現存します。公演は、毎年内容が変わり、外国人グループが日本の伝統芸能を披露することもあります。今回は、地元の練達な保存会の方々による公演と、次代の伝統文化を担う地元中学校の学生による出し物でした。私たちは、このような姿を間近に観ることによって、日本の地域に残る誇らしい伝統の魅力や文化の継承についてあらためて考えさせられます。

市長から直接教わる地域行政の学習

飯田市は、日本で最初の再生可能エネルギー導入の条例化や、地域環境権の提案など、先駆的な行政を進めていることでも有名です。私たちは、一緒に集った他大学の学生とともに、行政トップである市長から直接に話を聞き、また対話します。大都市に住んでいると役所や首長は遠い存在に見えることが多いのですが、このように市長と顔を合わせて話をすると地域行政がとても身近に感じられ、自分たちの住む自治体への関心もまたあらためて湧いてきます。

山間部の生活や歴史の体験

このフィールドスタディでは、飯田市内中心部だけでなく市内山間部を訪れ、地域で食文化体験や、山間部のまち歩き、旧小見学などをします。いのしし肉など地元の食材や、そばうち体験などから、間接的に地域の森林や農業等について身を持って学ぶこともできます。少し足を伸ばし、伝統的建造物群保存地区として有名な妻籠や馬籠の街を歩き、広域にわたる伊那谷や木曽谷の歴史にも思いをめぐらせました。

学習を終えて（参加学生の声）

「4日間、様々な経験をしました。まず、自分の住んでいる地域の文化や行事に誇りを持って伝承、参加している人々が多いことが飯田の魅力ということを実感しました。地域が活性化し、そして未来につなげていくには、地域の人々が自分の地域をよく知り、愛していないといけないと思っています。飯田市はそれを実践するための市での取り組みが存在し、また取り組む人々がいます。」 3年川嶋友理

「飯田市でのフィールドスタディを通して、自然、文化、行政や産業などの多方面から飯田市のまちづくりを学習しました。市長が話をされたとおり『共創の場』を作ることはまちづくりの重要な課題の一つです。外国人の私にとって、市役所から和服のハッピを貸してもらい祭りに参加し、自分が『飯田市民』の一員に変化。市民の方と心が通じ合う場を経験した本当によい機会でした。」 1年 袁真（エンシン）



保存された旧木沢小学校校舎で一緒に合唱



「飯田りんごん」踊りに他大学と共に大学連として参加

「地域の特性や既存資源を活かした持続可能なビジネスを考える」

担当教員名 金藤 正直

コース概要

日程	2017年8月21日（月）～24日（木）
場所	青森県津軽地方（弘前市、板柳町など中南地域）
参加人数	31名

コースのねらい

りんご生産量が日本一である青森県には、りんご産業の基盤組織（自治体、研究機関、農家、製品・加工、流通・販売など）が数多く存在しています。これらの組織は、それぞれが連携し、商品開発や販路開拓・拡大などを行っています。また、県内では最近、桃、ぶどう、在来種の野菜など、新たな

内容

今年度のFSでは、昨年度と同じように初日（21日）から弘前実業高等学校（弘実）の高校生10名に参加してもらい、事前学習時に編成した7つの高大連携チーム（生産・加工、広告・宣伝、農家（生産者）、販売、流通、観光、自治体）で、訪問先での学習とそれに基づく調査を行いました。

まず初日は、津軽ゆめりんごファームと弘前大学を訪問しました。最初の訪問先である津軽ゆめりんごファームでは、平井氏から、農産物の生産や加工・販売、そして、現在力を入れている観光農園の取組みに関するお話を聞きました。その後、同ファームにある桃、プラム、ブルーベリーの農園にも行き、もぎ取り体験も行いました。次の訪問先の弘前大学では、人文社会科学部の黄先生による国内外や青森県内のりんご産業や市場の現状に関する講義を受講した。初日は、以上2カ所の訪問先において、日本におけるりんご産業の現状を理解でき、また、最終日（24日）に報告するビジネスモデルを考えるヒントを得ることができました。大学での講義後、弘実に移動し、高校生・教員と大学生・教員で今回のFSの目的や取組内容などを共有するために交流会を開催しました。

次に、2日目（22日）は、板柳町に行き、津軽りんご市場、板柳町ふるさとセンター・りんごワーク研究所、monoHAUS（モノハウス）を訪問しました。津軽りんご市場は、日本で唯一りんごのみの市場（産地市場）であり、そこでは、市場内の見学

を行うとともに、市場で行われている現在の取組みに関するお話を聞きました。次に、板柳町ふるさとセンター・りんごワーク研究所では、葛西所長や會津氏など多くの関係者から、同町におけるりんご産業とそれを支える組織（町営の生産・加工・直売所）同士の関係、また、現在も業績をあげているりんごワー

な農作物にも力を入れ、りんご産業のような組織間で連携しながらビジネスを展開しています。このフィールドスタディ（FS）では、現地の高校生とともに、青森県津軽地方の農作物を活かしたビジネスに注目し、それに関連する組織や関係者への調査（半構造化インタビュー）結果や「まち」の歴史・文化・特性を踏まえて、①りんごや他の農作物の産業の歴史、②りんごや他の農作物の産業に関わる組織とその役割、③組織間での連携事業（ビジネスモデル）の現状と課題、④その課題を解決し、将来展開すべき地域活性化のためのビジネス提案を行いました。



桃のもぎ取り体験



りんご産業のレクチャー



市場内でのりんごのせり 木箱ビジネスのレクチャー



町営りんご事業のレクチャー

ク研究所のビジネスモデルの特長について学習しました。最後に、onoHAUS では、姥澤氏から、りんごの木箱を活かした商品開発とともに、現在研究中である木箱がもたらすりんごへのより良い影響に関するお話を聞きました。2 日目の訪問先は 1 ヲ所でしたが、町レベルでりんごを中心とした産業をさらに活性化させていくための方法を学習することができました。

続いて、3 日目（23 日）は、弘前市りんご公園と岩木山麓しらとり農場を訪問しました。まず、弘前市りんご公園では、りんご農家の高橋氏から 6 次産業化（シードル製造・販売）の現状と課題、また、野呂先生から県内におけるりんご産業の歴史とりんごの特性に関する講義を受講し、その後、園内の見学とともに、りんごのもぎ取り体験を行いました。次の訪問先である岩木山麓しらとり農場では、農場内の見学と、農場でとうもろこしを食べながら、白鳥氏から農場の歴史、在来種の野菜の可能性、農業のビジネスモデルの基礎となっている CSA（地域支援型農業）のお話を聞きました。3 日目は以上 2 ヲ所に訪問しましたが、県内のりんご産業の現状や課題、そして、大学の授業では十分に触れることができない 6 次産業化や CSA の特長と実践例を学習することができました。



シードル製造・販売のレクチャー



りんごのもぎ取り体験



CSA に関するレクチャー

最終日（24 日）は、弘前大学の内藤先生にも参加いただき、弘実において 7 つの高大連携チームによる持続可能なビジネスモデルの報告会を開催しました。この報告会では、各チームは、事前学習および 3 日間の学習に基づく研究・調査報告を行い、



打ち合わせの様子



報告会の様子

また、それに対する議論・意見交換を通じて、地域特性と既存資源を活用した県内で将来新たに展開すべきビジネスモデルと、その実用可能性を提案しました。その後、内藤先生より各チームの順位が発表され、最後に、弘実の山口先生の総評で報告会が終了しました。

学習を終えて

今後の FS も、これまでの取り組みでの反省点とともに事後学習で参加学生が行った自己評価の内容も踏まえて、将来必要とされる新たなビジネスを展開できるモデル構築を目指してもらえるコンテンツにし、参加学生（および高校生）により有効的な学びを提供していく予定です。最後に、今回の FS に参加した学生の感想を紹介します。

1) 参加学生の感想①

これまでの経験を活かして、この時期一番良い「りんご」を全国の消費者に届けたい、というりんご産業に関わっている方々の強い思いを感じることができました。

2) 参加学生の感想②

FS での学習を通じて、チームビルディングがうまくいったので、メンバー間で合意を得ながら、りんご産業の課題とその解決策を話し合い、報告することができました。



FS 参加者全員の写真

「陸・海・空・宇の交通運輸を支える」

担当教員名 北川 徹哉

コース概要

日程	2017年8月29～31日，9月1日
場所	東京都，千葉県，茨城県
参加人数	24名

コースのねらい

社会と経済の基幹である陸上，海上，航空の交通運輸を支える現場，そして地上と宇宙とを結ぶ重要施設を訪れます。業務の魅力と重責を肌で感じましょう。

内容

行程1日目は，竹芝小型船ターミナルより新東京丸に乗船し，東京港の施設を海上で案内していただきました。新東京丸は東京都港湾局が所有する視察船であり，世界各国の要人を案内するときにも使用されます。船内は立派な海上会議室であり，東京港の歴史や施設さらにはゴミ処理・埋立までも，わかりやすい解説により勉強することができました。我が国は海洋国家であり，海上物流とそれを支える港湾設備が高度に発達してきたことを改めて実感した，東京港一周の船旅でした。2日目は成田国際空港を訪れ，ガイドさんの案内で隅々まで勉強しました。学生は，第一ターミナルの屋上で滑走路全体を見わたしながら聞いた説明の中で，各滑走路の識別記号・番号の意味が印象に残ったようです。また，国際空港ならではの各国の文化に配慮された各種施設にも感銘を受けていました。すべてのターミナルを徒歩と連絡バスで回ったのでヘトヘトになりましたが，航空産業の地上業務について多くを学ぶことができました。3日目は筑波宇宙センターを見学しました。国際宇宙ステーションでの生活を想定した閉鎖環境や低圧環境への宇宙飛行士の適応訓練設備などを見ることができました。とくに，国際宇宙ステーションの一部である「きぼう」の運用管制室では，学生は大きなスクリーンとコンピュータ群に圧倒され，地上から24時間体制で「きぼう」を支えている管制官の働きぶりに感動していました。撮影等は一切禁止されているため，スマホやカメラなどは一旦預けることが義務づけられ，宇宙開発は機密とセキュリティの塊であるということを実感しました。4日目は，羽田空港の一面にある日本航空機体整備工場を訪れました。広大なドックに入ると日本航空の機体だけでなく，なんと政府専用機も整備中でした。整備士の方々が機体の各部で慎重に作業をしており，安全で円滑な運航と乗客の命にかかわる重責が伝わってきました。なお，政府専用機が整備されているところはめったに見られず，また，日本航空が整備を請け負う期間も終了するとのこと。今回，偶然にも見ることができたのは幸運でした。政府専用機を撮影することは許可されていましたが，それを使用することは禁じられていますので，その写真を本稿に掲載できないのが残念です。

学習を終えて

「航空業界に興味を持っているので，とくに成田国際空港や JAL 機体整備工場の視察は大変勉強になりました。JAL 機体整備工場では CA の制服を試着するなど，楽しい体験もできました。良い思い出になります。」（1年生・女性）



新東京丸への乗船

筑波宇宙センターにて



成田国際空港にて



日本航空機体整備工場にて

「東京いー散歩」

担当教員名 後藤 彌彦

コース概要

日程	2017年9月5日、7日、12日、14日
場所	東京官庁街、下町、山の手
参加人数	19名

コースのねらい

江戸と東京のまちづくりに関する施設を訪ね、その歴史を学ぶとともに、今後の東京の都市環境、都市景観、都市の緑と防災を考える視点を提供します。

内容

- 1日目 昭和初期の官庁計画による旧文部省ビルで大臣室などを見学しました。次ぎに国会議事堂、国会前庭、桜田門などを遠望しながら、明治の官庁集中計画による旧法務省庁舎と中の法務資料展示室を見学しました。農林水産省食堂で昼食ののち、日比谷図書館（千代田区の都市形成に関する展示）、日比谷公会堂を見つつ、日本初の西洋式庭園である日比谷公園を散策しました。次ぎに二重橋を臨みながら皇居外苑を散策し、大手町噴水公園で解散しました。
- 2日目 深川江戸資料館で江戸の暮らしを学んだのち、清澄庭園を訪ねその歴史と都市の緑の拠点としての役割を学びました。隅田川に沿って散策し、気候緩和など都市における河川の働きを考えながら、清洲橋などの景観を楽しみました。江戸東京博物館で昼食ののち、横網町公園で慰霊堂、復興記念館を訪ねました。旧安田庭園を経て、最後に明暦の大火に関係する回向院を訪ね、両国で解散しました。
- 3日目 上野公園を博物館、東照宮、大仏、清水堂などゆっくり散策しました。それから不忍池を経て、旧岩崎庭園でコンドル設計の明治期の洋館建築を見学しました。東大構内を散策し、赤門や昭和初期の校舎建築を見るとともに食堂で昼食をとりました。歴史ある菊坂を経て水道歴史館で江戸から現在に至る水道を学び、終わりに震災小公園元町公園を訪ね、水道橋で解散しました。
- 4日目 王子駅近くの音無親水公園を経て、江戸庶民の行楽地飛鳥山公園を歩き、隣の渋沢栄一の屋敷跡を訪ねました。西ヶ原一里塚を経て、地震の科学館で震度7を体験しびっくりしました。旧古河庭園で和洋調和した庭園を散策し、女子栄養大学で昼食しました。午後はソメイヨシノ誕生の地染井の里、染井墓地を経て、西ヶ原ふれあい公園で防災と環境を考慮した都市公園を見学しました。終わりに、旧中山道を歩きとげ抜き地蔵に参拝し、巣鴨で解散しました。

学習を終えて

今回いー散歩のFSで多くの江戸の歴史を学び、当時生き抜いてきた人々が様々な知恵や工夫をなされていたと感じました。技術革命後の東京は物にあふれ、情報もSNSで飛び交う時代になり、便利な生活を私たちは当たり前に思っていますが、こうして江戸時代の生活を見てみると物の有難さが身にしみて感じました。

2日目に訪れた深川江戸資料館では江戸の町並みが忠実に再現されていて、江戸時代の人々の暮らしを体験することができました。お米の蔵には戸を閉めると重りが落ちてロックがかかる仕組みになっていて、今でいうオートロックの機能が古くから使用されていて感動しました。それと同時に、物が今よりもはるかに乏しい時代の中で生まれたアイデアは今の時代にきちんと受け継がれてきているのだと感じました。昔の人々に目を向けることは現代の不便なく暮らせる生活が当たり前ではないということを実感させる良い機会であると思いました。

この4日間のFSでは多くの文化財に携わり歴史を学ぶことができました。普段は、あまり観光はしないので多くの建物を見学し江戸の文化を知ると共に現代までの道のりを学ぶ良い体験ができました。 2年 白鳥 未歩



「文学から「外」へ開く— —金沢・能登における文学の風景と文化について」

担当教員名 竹本 研史・杉戸 信彦

コース概要

日程	2017年8月22日～25日
場所	石川県金沢市・七尾市・志賀町
参加人数	16名

コースのねらい

本企画は、泉鏡花、徳田秋聲、室生犀星という、3人の文豪を輩出した金沢など、文学作品の舞台に選ばれることの多い石川県をフィールドにして、文字によって表象される世界と、実際に自らが現地で目にする風景とのあいだで、どれほど差異があるのかをとくに着目することによって、文字芸術の可能性を問い直すことを目的としています。

内容



初日は、新潟大学人文学部津森圭一先生による「風景」に関する講義も聴講しました。



映画版『ゼロの焦点』で舞台となったヤセの断崖。作品の時期とは違い、夏ですが、日本海の荒波と強い風が織りなす能登半島西岸の自然の峻厳さを肌身で感じています。



1820年創業以来、そのままのかたちで残されている、ひがし茶屋街のお茶屋「志摩」。従業員の方からお茶屋文化についての話を伺いました。

初日は、泉鏡花、徳田秋聲、五木寛之、古井由吉らの作品舞台となった、浅野川流域を散策し、事前学習で分析した文学作品による表象と、自分たちがまさに目撃している風景との差異について検討しました。また、徳田秋聲記念館では、学芸員の方に、徳田秋聲とその文学作品の全体像についてレクチャーを受けてさらに理解を深めました。

2日目は、能登に関する泉鏡花『山海評判記』と松本清張『ゼロの焦点』との表象の差異を念頭におきながら、能登半島東部の和倉温泉と西部の能登金剛（巖門・ヤセの断崖）をまわりました。とくに、能登金剛では、清張の描く冬の厳しい自然を想起しながら日本海を望み、バスのなかでは、地図と『ゼロの焦点』を照らし合わせながら、清張の記述の矛盾点を確認しました。

3日目の午前中は、江戸時代より醤油の生産地として名高い金沢市大野町を訪れました。そこでは、醤油会社の社長さんから大野町の街並み保存についての取り組みを学びました。午後は、初日で歩いた浅野川流域と比較しながら、室生犀星、吉田健一、中原中也、井上靖らの作品舞台となった犀川流域を散策しました。妙立寺の建物内をめぐりながら、吉田健一『金沢』で幻想への入り口として描かれる必然性を実感したり、室生犀星記念館や雨宝院では、ガイドさんやご住職から室生犀星の人物像についてお話を伺ったりしました。



初日に歩いた浅野川河畔（左）と3日目に歩いた犀川河畔（右）。川自体の雰囲気も双方で異なっていることがわかります。

4日目は、吉田健一『金沢』の舞台である成巽閣と、多くの文人たちに愛された兼六園を訪れました。成巽閣では、建築構造とマリンプルーの群青の間に目を見張りながら、吉田の「西洋」について考察をめぐらし、雨の兼六園では、文人たちがそれぞれ取り上げた場所の違いについて、それぞれの作品の描写を思い出しながら、しばし思案にふけりました。

レポート課題として、学生たちが毎日つけていた「振り返りシート」に記された記録に基づき、改めて金沢・能登を舞台にした文学作品を分析し、各自が実際に目にした風景との差異について考察しました。事後学習では、各人のレポートをめぐり、活発な議論がなされました。なかでは、現実の風景が、事前学習の際に文学作品を通して想像していたものと類似していたとする学生、あるいは逆にまったく異なっていたという学生もあり、かつその差異についての評価も正反対だったケースもありました。

学習を終えて

環境問題を考える学部にいる上で、風景というものはあまりにも身近なもので、あまり深く考えることはありませんでした。風景を通して無意識に感じる五感の喜び、そこから蘇る過去の記憶、そういった無意識の感動を改めて学びの観点からアプローチすることができました。とても貴重な体験でした。

2年 岡崎 元哉

同じ場所でも、記憶に残るその場所の風景は、人それぞれ違うということを強く実感しました。

訪れた中には、重要伝統的建造物群保存地区のひがし茶屋街もありました。今も昔も変わらぬ風景を残し続けることで、作品内で著者が表現する風景と、自身が実際に感じた風景との差異がよりリアルに感じる面白さを知ることができ、また様々な作品の舞台となる現地への興味も強まりました。

3年 酒井 理絵



2日目の巖門にて集合写真

「科学博物館で学ぶ」

担当教員名 谷本 勉

コース概要

日程	2017 年 8 月～2017 月 9 月
場所	各地の博物館等
参加人数	21 人

コースのねらい

関東地方の博物館を環境問題等を学ぶための現場（フィールド）として自在に使いこなし、生涯学習の場となるようにすることを目的とします。

内容

「科学博物館で学ぶ」は、グループ学習ではなく、個人参加を原則とします。参加者がそれぞれ立案した計画に従って学習していきます。具体的には、各地の科学博物館でどのような参加型の企画・セミナーが行われているかを調べ、参加するイベントを決定し、学習していきます。

例年 6 月中旬の土曜日の午後、最初の説明会を行います。この説明会にはできるだけ希望者全員の参加を認めています。ここで詳細な実施要領を解説します。その後、できるだけ夏期休暇に入る前に学習計画書を作成し、担当教員と相談しながら、参加する学習内容についての理解を深めます。

学習計画に際しては、1つのテーマが4時間以上のものを1日分の学習として認め、それ以下のものを半日分として、合計4日分の学習をすることを義務づけています。多くの場合8月中の土・日を何度か使うことになり、夏期休暇の他の計画との折り合いをつけることが重要になります。

今年の主な参加企画には次のようなものがあります。

- 8月5日「国立科学博物館附属自然教育園」：学習のテーマ「大学生のための菌類学入門」
- 8月6日「神奈川県立生命の星・地球博物館」：学習のテーマ「パソコンで鉱物結晶図をかいてみよう」
- 8月8日「観音崎自然博物館」：学習のテーマ「夏期磯の生物観察会」
- 8月9・10日「国立科学博物館」：学習のテーマ「古植物研究法講座」
- 8月12日「千葉県立中央博物館」：学習のテーマ「化石の模型を作ろう」
- 9月10日「国立科学博物館」：学習のテーマ「虫の生活を観察する会」

ある参加者の感想

「自然環境から学ぶことは色々あり、その学ぶ場所としては学校よりも博物館が適していると私は考えている。それは学校では決められた座学の学習が大部分を占め…それに対し博物館では学校では学ぶことのできない環境とのふれあい部分を補うことができる。」



ウミクワガタ（観音崎）



カメムシタケ



地形模型（富士山）



化石模型（アンモナイト）

「歴史的環境の保全とまちづくりを学ぶ」

担当教員名 根崎 光男・板橋 美也

コース概要

日程 2017年9月4日、9月7日～9日

場所 東京都中央区、神奈川県箱根町

参加人数 23名

コースのねらい

本コースは、各地に残る史跡や建造物、文化的景観などの歴史的環境を保全していくための取り組みとその課題を学び、それらがまちづくりに果たす役割を考えることを目的としています。



浜離宮恩賜庭園・松の御茶屋で講義を聞く

内容

本コースは、日帰りコースと2泊3日の宿泊コースから成り立っています。前者は東京湾に面して江戸幕府将軍の別荘から天皇家の離宮となった浜離宮恩賜庭園、後者は旧東海道の位置づく小田原城、箱根関所、旧街道石畳・杉並木・一里塚、三島大社を訪ね、その保全の実情を見てきました。いずれも、国内有数の風光明媚な観光地であり、かつ歴史資源の活用とまちづくりの取り組みとを学べる恰好の地域でもあります。それらの現場に行って、直接、担当者の方からその現状と課題について話をうかがうことで、今後の学習に役立てられるように配慮しています。

学習を終えて

今回参加させていただいたフィールドスタディでは、歴史的環境の保全とまちづくりへの取り組みについて学習しました。浜離宮恩賜庭園、小田原城、箱根関所及び旧東海道関連史跡、三島大社などを巡りましたが、どこも歴史が深く、魅力的な景観と建造物であり、そのまち全体を豊かにする観光資源だと感慨深く思いました。各地域で共通する歴史的環境の観光資源への活用についての思いは、「どうすればより多くの観光客に楽しんでもらうことができるか」ということが大きな課題であり、行政の担当者を先導にその地域に住む人々の協力のもと、よりよいまちづくりをしていくためにどういう政策を打ち出すべきかの試行錯誤を重ねていました。現地に出かけたことで、そうした実情を担当者の方々から直接聞くことができ、また実際に史跡や歴史的建造物を見学したことで、諸課題を肌で感じることができました。座学では味わうことのできない学びを、五感で体験することができ、とても充実した4日間でした。(3年 青木 千紘)



旧街道石畳を歩く



箱根関所の概要説明を受ける

「明治日本の産業革命遺産とエコツーリズムによる地域振興 ～長崎・島原エリア～」

担当教員名 長谷川 直哉

コース概要

日程	2017年9月11日～14日
場所	長崎県長崎市・島原市
参加人数	21名

2015年に世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」として正式登録された旧端島炭鉱（通称：軍艦島）などの産業遺産を巡り、日本の近代化を支えた基幹エネルギーと産業の結びつきについて学びます。また、島原地区における世界ジオパークや文化を活用したエコツーリズムによる地域振興の実態を視察します。

コースのねらい 内容

このフィールドスタディのハイライトは、①世界文化遺産である軍艦島への上陸、②近代日本の産業革命の起点となった三菱重工長崎造船所の訪問、③雲仙普賢岳を中心とした島原半島世界ジオパーク体験の三つです。

「軍艦島（端島）」は、1890（明治23）年から本格的に海底炭坑として良質な製鉄用原料炭を供給してきました。東京ドームの5個分という小島ながら、最盛期には5,200人の人々が住み、人口密度は東京の9倍を超えました。島内には、病院や学校・寺院・神社・派出所や映画館・理髪店などが立ち並び、島の施設だけ人々の日常生活が可能な都市として機能していました。繁栄を極めた軍艦島でしたが、産業の基幹エネルギーが石炭から石油へと移ることにより衰退の一途をたどり、1974（昭和49）年に閉山し、全ての住民が島から離れて現在は完全な無人島となっています。

軍艦島は2001（平成13）年に所有者である三菱マテリアル株式会社（元三菱鉱業）から譲渡され、現在は長崎市の所有となっています。

その後、2015年、国際記念物遺跡会議（イコモス）により、軍艦島を構成遺産に含む「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界文化遺産に登録され、再び注目を集めています。2017年公開された韓国映画は軍艦島を強制徴用された朝鮮人らが劣悪な環境で労働を強いられている地獄島として描いており、日韓の歴史問題のテーマとしても扱われています。

今回のフィールドスタディでは、三菱財閥が採掘権を握ってから、石炭産業、製鉄、鉄鋼、造船など近代日本の産業革命を支えた軍艦島の社会経済史的な意義について考え、ここで働き生活した人々の痕跡を体感しました。



「三菱重工長崎造船所」は、2015（平成 27）年に世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成施設の一つです。長崎造船所は三菱重工業株式会社の発祥の地です。いうまでもなく同社は三菱財閥の中核企業ですが、長崎市の経済基盤も支えており、同市は長崎造船所の企業城下町として繁栄し現在に至っています。長崎に投下された原子爆弾によって被爆したものの造船所の施設は完全な破壊を免れ、戦後の長崎の復興を大きく支えてきました。

ここでは多くの民間船舶が建造されましたが、第二次世界大戦中に戦艦「武蔵」をはじめとする多くの軍艦が建造されました。現在でも海上自衛隊の護衛艦を多数建造しており、軍需産業として側面も持っています。そのため、世界遺産登録の構成要素の一つになりましたが、自衛隊の艦船などの整備をしている関係で非公開施設となっています。造船所資料館には長崎造船所前身時代から現在に至る技術の進歩を物語る品々や写真など 900 点余りの史料が展示されており、スタッフによる詳細なレクチャーを受講しました。



「島原半島世界ジオパーク」の中核をなす雲仙火山では、有史以来起きた 3 回の噴火のうち、平成噴火と寛政噴火については詳細な記録が残されており、人々が火山噴火とどのように向き合ったのかを学ぶ事が出来ます。1990（平成 2）年 11 月から始まった雲仙普賢岳の噴火活動は終息まで 4 年 8 ヶ月を要し、「火砕流」と「土石流」により多大な被害を蒙りました。フィールドスタディで訪れた雲仙岳災害記念館（愛称：がまだすドーム）は、雲仙普賢岳噴火災害の脅威と教訓を学習・伝承する施設として設置されたものです。同記念館では、島原観光連盟の坂本専務理事からジオパークやエコツーリズムを中核とした地域振興策についてのレクチャーを受講後、本学学生との意見交換を行いました。ジオパークとは、大地の成り立ちや地形・地質をテーマにした自然公園です。地域全体を自然の博物館と捉え、そこに含まれる自然景観、地質、動植物などの自然環境と、それらを利用している人々の暮らし、歴史、文化を展示物と見なしたテーマパークともいえます。雲仙岳災害の被災者でもあるジオガイドの方の臨場感ある説明によって、火山災害の恐ろしさを追体験するとともに、復興に向けた人々の力強い思いを感じることができました。

学習を終えて

一番印象的だったのは、軍艦島に上陸できたことです。恥ずかしながら、私は今回のフィールドスタディに参加するまで軍艦島の存在を知りませんでした。日本にこのような島が存在すること、日本の産業の歴史をこのような形で見る事ができることに衝撃を受けました。石炭から石油へのエネルギー革命によって軍艦島は衰退し、現在は無人島となっています。活力ある街でも社会環境の変化によって衰退することは、今の時代にも起こりうることだと思います。パリ協定の発効によって、化石燃料から再生可能エネルギーへのシフトが加速しています。石油産業の衰退によって、軍艦島と同じような道をたどる地域は少なくないのではないのでしょうか。オイルマネーによって繁栄を謳歌する国々では、エネルギーシフトに起因するリスクが経済に少なからぬ影響をもたらすと思います。脱炭素社会への移行によって、私たちの生活は様々なリスクに晒されるでしょう。しかし、そうしたリスクの中には、新たなオポチュニティが生まれる可能性もあります。私は軍艦島を反面教師として位置づけ、石油依存から脱却した新しい社会のあり方を問い直すべきだという思いを強く抱きました。（2 年 岸 雅海）

「金属リサイクルと土壌浄化」

担当教員 藤倉良

コース概要

日程	2017年8月7日～10日
場所	秋田県大館市と小坂町のDOWAグループ各社
参加人数	20人（うち引率教員1人）

内容

日本は資源に乏しい国だと思っていませんか？ 実は資源大国なのです。私たちの国には6,800トンの金が蓄積されています。これは全世界の埋蔵量の16%に相当し、金鉱で有名な南アフリカ共和国の埋蔵量を上回っています。銀も世界の埋蔵量の24%もあります。どこにそれだけ多くの資源が眠っているのでしょうか。机の引き出しで使われないままに眠っているスマホや携帯電話などの小型家電製品の中です。スマホ一台にはごくわずかしが含まれていませんが、チリも積もれば山となるです。これを都市鉱山と呼ぶ人もいます。東京オリンピックのメダルに、リサイクルで回収された金や銀を使うことも考えられているようです。

今回見学させて頂いたDOWAグループは、秋田県鹿角郡小坂町で1884年から銅鉱石の採掘と精錬を行っていた小坂精錬所に始まります。ここにある銅鉱山から産出される黒鉱と呼ばれる鉱石には主成分の銅以外にも様々な金属が含ま

れていて、金や銀などが分離されてきました。今では鉱山は閉山されましたが、長年培われた技術を生かし、小型家電製品から貴金属やレアメタルなど16種類の元素が回収されています。

ほかにも、重金属で汚染された土壌を浄化する施設などを見学させて頂きました。



スマホや携帯電話などの外側です。これからアルミや銅などが回収されます。

学習を終えて

家庭や社会で不要となった家電製品や携帯電話などが、リサイクルの第一線として活躍していた。受け入れから手分解、破碎・選別（粉碎・洗浄）され、リサイクル原料として厳重に保管・管理され、いくつかの工程を経て金や銀、銅などの塊として生まれ変わっていた。13kgの金塊を直接触る機会があったが見た目より重く、手のひらに何とも言えない不思議な重力を感じた。（社会人学生のIさん）

コースのねらい

DOWAグループは貴金属を回収する高い技術確立し、これを基に金属リサイクルや土壌浄化などを行っています。その現場で各種の技術について学習します。



携帯電話の分解体験です。思ったより頑丈で簡単には分解できません。



回収された13キログラムの金塊を手持たせてもらいました。右下は60キログラムの銀塊で簡単には持ち上がりません。背後ではガードマンが目を光らせていました。

「湾岸がささえる都市の環境 ー エネルギー・廃棄物・リサイクル ー」

担当教員名 松本倫明

コース概要

日程 2017年8月22日～25日
場所 東京ガス(株)根岸工場LNGスクエア、J-POWER 電源開発(株)磯子火力発電所、東京都スーパーエコタウン、JXTG エネルギー(株)根岸製油所、かわさきエコ暮らし未来館、岩谷産業(株)水素ステーション芝公園・トヨタショールーム、東京都下水道局 砂町水再生センター

参加人数 19名

内容

大都市に住む我々は大量のエネルギーを消費し、大量の廃棄物を排出します。また廃棄物のある部分はリサイクルされ、ふたたび消費されます。このような、物質とエネルギーの流れは都市に生活していると実感しづらいものです。このコースでは、大都市から近い湾岸地区に出かけ、エネルギー、廃棄物、そしてリサイクルに関連した施設を集中的に見学します。

訪問先は比較的近距離のため、すべて日帰りで行います。社会人学生や1年生が参加しやすいコースです。

東京都と神奈川県の実地部にある合計6施設を4日間で訪問します。訪問先は、東京ガスの液化天然ガスの工場、石炭火力発電所、石油精製施設、メガソーラー（大規模な太陽光発電）、水素自動車と水素ステーション、下水処理場、東京スーパーエコタウンに展開するリサイクル施設、そして東京湾にある巨大なゴミの埋立地と盛りだくさんです。

実施期間中は天候に恵まれましたが、恵まれすぎて猛暑で大変でしたが、充実した4日間でした。事前学習と事後学習のグループワークでもみんなで議論しながらたくさんのことを学習しました。

学習を終えて

たくさんの施設を訪問しましたが、その中で水素自動車が印象的でした。水素自動車は静かでCO₂を出しません。価格の低下が普及するためのひとつのポイントだと思いました。(エルトン・チャン SCOPE 留学生2年)

コースのねらい

このコースでは、エネルギー・廃棄物・リサイクル関連の施設を訪問します。湾岸エリアに点在するこれらの施設を短期間で集中的に見学します。見学を通じて都市の環境を支える科学技術を学ぶことを目的としています。さらに都市におけるエネルギーと物質のフローについて考えます。またグループで議論しながら学習することに力点を置き、受け身ではなく、双方向の学びを提供します。



火力発電所の巨大なタービンの前で集合写真。



水素ステーションとショールームでは水素自動車に試乗しました。